

# 子供に学ぶ

佐藤磐雄

それほど手をかけていないようで、や  
や放任ぎみ。  
往々にして、こんなタイプの子供は  
授業中に態度を崩したり、理屈を振り  
かざし教師に食い付いたりすることが  
あり、扱いにくいものである。

〈T夫〉  
国語の教科書を読む。たどたどしい。

六年生でありながら、一字一語たどつ  
ていく。漢字が出てくると、ハタと口  
をつぐむ。書いた文字は、ミミズがは  
つてある。書いた本人さえ読め  
そうもない。話すことになると、おど  
おどしてしまい、はつきりしない。

しかし、休み時間になると、いちも  
くさんに校庭へ。目は、生き生きとし  
顔は汗、汗、汗……。教室でじつと座  
っている苦痛は、大変なものだろう。

このT夫は、四年生から持ち上がり  
ているが、今日まで、登校してくるの  
がいちばん早い。すぐ、窓を開けるの  
が、彼の毎朝の仕事で、決して忘れた  
ことがない。春夏秋、そして冬も、よ  
ほどの悪天候でない限り、毎朝きちんと  
窓が開いているのである。今までに  
一度も、このことについてほめたこと  
はない。彼より遅れて登校してくる級  
友も、彼の仕事に特に注目するものも  
いない。それでも、朝は、必ず彼が窓  
を開けておいてくれるのである。

〈S男〉

恵まれた家庭環境。両親の学歴も高  
く、成績は抜群である。次男坊で親は

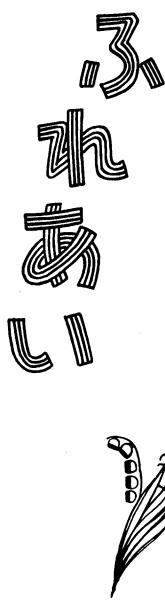
旗立てが、道路わきの田の中に横倒し  
になっていた。道路より少し低いところ  
で、通行の際には、ほとんど気づか  
れない。横断小旗が、そこにあつたな  
どということも、だれ一人記憶してい  
るものもいなかった。

T子は、これを見つけた。小旗立て  
の底には、かなりの泥が積もっていた。  
彼女は、これを起こし、素手で泥を払  
いのけ、道端に引き上げ、かつてそれ  
がそこに備えつけられていたように道  
路の端にもどした。

たまたま通りかかった教師が、この  
一切を見ていた。後でおほめの言葉を  
ちようだいしたらしい。しかし、彼女  
はなんのことではめられているのかさ  
っぱり分からぬといふ様子で、キヨ  
トンとしていた。

「当たり前のことを、当たり前にし  
ただけなのに」という彼女の言葉。  
耳が少し遠くて、授業中の反応も鈍  
い。理解が遅くて成績はパツとしない  
子である。

## 教育隨想



当てはまらない。当然、教科書の内容  
などは、理解し切っている。得意な理  
科では、こつこつ自分で材料を集めて  
実験を済ませ、結果の考察も済んでい  
る。それにもかかわらず、授業では、  
常に、そんなそぶりなどは全く見られ  
ず、発問や指示に本気に取り組み、ひ  
とことひとこと、目を光せながら、  
うなずいて、学習を進めているのであ  
る。

カーテンの扱いが、鉄筋校舎では、  
よく問題になる。S男は、自分のポケ  
ットの中にひもを入れておき、それを  
取り出してはカーテンをたばねておく。  
扱いが悪いと、すぐそのひもも見失つ  
てしまふが、次の日には、別のひもを  
持ってきて、結んでおく。

今、私の手の中には、三十八名の子  
供たちがいる。それぞれに個性があり  
それぞれの日々の行動の中に、ハッと  
させられることがある。  
つい最近までは、自己中心的な行動  
が多く目についていたが、その成長の  
中で、こんなに素直に自然に行動に移  
す力は、どこで身についていったもの  
なのだろうか。  
道徳の時間や学級指導などの時間は  
それぞれ自分自身への戒めの時間にも  
なっているような気がしてならない。  
(伊達郡保原町立保原小学校教諭)

こんな細かい気配りを、彼はどこか  
ら覚えてきたものであろうか。  
我が学級のカーテンは、いつも使用  
されていないときは、きちんとたばね  
られて所定のところにあるのである。